



@幸せな贈り物

どこにも こんな地獄はありません…

最小限の常識、基本、配慮もない人々、その人々を通して作られている地獄のような現実、表現することもできません。2014年4月16日に発生したチンドのサムウォル沈没事件、外電は事故収拾の絶望的な状況と遺族の怒りと挫折を見ながら「どこにもこういう地獄はないだろう…」と報道しました。

このようななかで、気が抜けた政治家たちの様子は、全国民を怒らせて、政府に対する最小限の信頼まで崩していっています。サムウォル号の惨事の現場の死者名簿の前で記念撮影をしようとして、職位を剥奪された安全行政府監査官と公務員たち、子どもたちの生死もわからないのに、だいたい色系統のシャツと「国会議員000」と書かれたチョッキ、半ズボン、運動靴を着用してクァンジュ常務市民公園で開かれたマラソン大会に参加して、自分の健康を心から整える国会議員、救助された学生たちと悲しみに浸っている失踪者の家族がいるチンドの室内体育館で、平然と儀式用椅子に座ってテーブルの上に置かれたカップラーメンを食べながら、職員にいっしょに食べようと話す長官、犠牲者の学生葬儀場を訪ねた場でも、遺族の前で「教育部長官が来られます」として、長官の位置で傲慢に偉そうにする公務員など、時間がそんなに残っていないので、より一層積極的な搜索をしてくれと注文する遺族の前に「私ができることはあまりない」という式の発言をする無責任な庁長、大惨事の雰囲気の中で爆弾酒の酒の座に参加した市長、このような状況の中で政治の理論を持ち出して最小限の沈黙も守れない最高議員…話す言葉がありません。ある両親は、こういう反論コメント文をはっておきました。

「今回の惨事の原因と政府の事故収拾過程を見ながら、娘とその次世代のために、移民に行くべきだという考えを初めてするようになりました」

私たちは、まだ2010年3月26日にペンニョン島近海で起きたチョンアン艦事件で46人の勇士のことを胸に含んでいます。そして、沈没事件以後の東亜大医大のキム・ドクキュ教授の「チョンアン艦の失踪者の生還祈願の詩」を記憶しています。

「772艦の水兵は帰還しなさい。772艦よ出て来なさい。国民みな切なく待っている。漆黒の暗さも、西海のどんな急流も、あなた方の帰還を防止できない…荒い水の流れを破って海上に浮上しなさい。全力をつくして私たちのそばに戻りなさい… 772艦の水兵答えなさい。名を呼ぶ。水兵は直ちに答えるように願う…呼

ばれた水兵は直ちに帰還しなさい。これがあなたらに大韓民国が与えた最後の命令だ。大韓民国を守られる神よ！まだ作戦地域に残っている私たち 772 艦の水兵を救ってください。私たち 46 人の韓国の息子たちを冷たい海底に孤独に置かず、国民みながつ暖かい家へ生還させてください。かならず、そのようにしてください」

彼らはずいに私たちのそばに生きて返ってくることができませんでしたが、むしろ、国民の胸の中に永遠に記憶される最も美しい名前になりました。46 人の一人一人の死が大切なのは、国民と国の安全を彼らの全生涯の中に入れたためです。

ところが、全国民をうつ病に陥るようさせたチンドのサムウォル号の沈没事件は、そのような事件ではありません。最小限の基本、常識、配慮さえもない獣のような人間の誤った選択と判断が表わした、あきらめべき人災です。考えもなく、ただ虚勢と不安が共存する無概念、無人性の世代を中 2 世代と言って、お金の目が見えなくなって、いのちを物よりもっと悪く取り扱う人間こそ、世の中でなくならなければならない無脳の人間だと言えます。

子どもを先に送った遺族とともに心より神様の慰めを分かち合いたいです。

そして、ともに私の人生の避難所、人間の永遠な安全地帯を探してみようをお願いします。

人生の永遠な安全地帯 詩篇 46 篇の 1 節から 3 節を見れば、患難にあった現実の前でこういう告白が出てきます。「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」詩篇 4 篇 8 節で、ダビデはこのように告白しました。「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」

聖書は、人間のはじまりと終わりが、のろいと滅びではなく、永遠な祝福であったことを語っています。魚が水の中に生きて、木は地に根をおろして生きるように、人間は本来は、神様のかたちとして創造されて、神様とともにいて、すべての万物を治めて生きるように祝福されました。

ところが、目に見えない悪い存在であるサタンにだまされて神様を離れる罪を犯すようになり、このときから、人間の運命はサタンに左右されて、罪とのろいと苦しみの中に陥るようになったのです。

理由もないむなしさと不安が訪ねてくるようになって、何の理由もなしで災いとのろいの中に陥るようになりました。人間はこの問題を解決してみようと、あらゆる努力をつくしてみようのですが、善行や哲学、宗教、倫理、道徳では解決することができないのです。

それゆえ、神様が道を開いてくださいました。エデンの園で神様との約束を破って離れて、サタンののろいの中で生きていかなければならない時も、神様は人間のための安全地帯を約束されて、全人類が滅ぼされる大洪水の中でも、神様は安全地帯を備えてくださいました。

人間が解決できない原罪、その結果で訪ねてきたのろいと災い、運命と運勢、目に見えないサタンの働きを解決するキリスト (Christ) を送ってくださると約束されたのです。そして、キリストがこの地に来られて、人間の贖罪のために、十字架で罪がまったくないのに死に、キリストという証拠で復活して、サタンの権威を砕かれました。私たちがまだ罪人であったときに、キリストが私たちのために死なれることによって、神様が私たちに対する自らの愛を明らかにしてくださったのです。人間が神様に会える道、すべての罪とのろいの災いから解放される道、サタン (悪魔) のしわざを打ちこわし、その手に捕まって奴隷になっている者たちを解放する道になってくださいました。聖書は、その方がイエスであることを語っています。イエス・キリストを信じて、私の人生の主人として受け入れるとき、すべてののろいと災いから永遠に解放される神の子ども祝福を味わうようになるのです。

今、あなたの苦しみは何でしょうか。イエス様は、あなたの苦しみをご存知で、それを解決することを望まれます。すべての人生の苦しみ、そこに永遠な安息と平安を与えることを願っておられます。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。

わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」ヨハネの福音書 14:27

祈りは 霊的な科学です

どのようにすれば、成功することができるのでしょうか。聖書は科学的な生活を送らなければならないと語っています。そして、その科学には3種類があります。1つ目は、目に見える科学です。それゆえ、勉強することで専門性を持つのです。2つ目は、目に見えない精神科学です。精神がまちがっていると、どんなに勉強しても仕方がありません。心理学と哲学を勉強するのは、精神科学が存在するからです。ときどき見れば、実力はあるのにとても軽々しくふるまう人が多くいるでしょう。精神科学がだめなのです。3つ目は、それよりさらに重要な科学である霊的科学です。人間は霊的存在で万物の霊長です。最高の名門大学であるカリストやハーバードでなぜ自殺をするのでしょうか。なんのために全世界に精神疾患がますます増えているのでしょうか。霊的科学を知らないからです。

霊的科学を味わう生活を送ろうとするなら、先に重要なことを回復しなければなりません。本来の人間は神様のかたちとして創造された、祝福された霊的存在でした。ところが、この祝福をサタンという暗やみの存在の策略に陥って奪われてしまいました。それゆえ、世の中は科学が発展するほど、墮落と混とんの文化がますます深くなっていっています。科学的に説明できない霊的な病気と、精神病があふれています。知識はあるのに霊的な力はありません。お金はあるのに霊的には貧しいです。それで、神様がサタンとのろいと運命から抜け出せるように、キリストを送ると約束されたのです。この約束を信じて、神の子どもになるとき、神様がくださる力と祝福を持って世の中に出て行って勝利するようになります。

その力と祝福を味わう鍵がまさに「祈り」です。聖書には祈りの答えに対する約束がたくさんあります。

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」ヨハネ 16:24

祈ればどんなことが起きるのでしょうか。イエスを求める者に聖霊をくださると約束してくださいました。(ルカ 11:13) 聖霊とともにいて、聖霊で導いて、聖霊で働いてくださいます。祈れば、主の御使い(天使)が動員されます。天使は、神の子どもに仕えるように造られました。(ヘブル 1:14) 祈れば、サタンの勢力が崩れて、不信仰が離れるようになります。祈れば、すべての問題に対する答えをくださいます。神様はすべてのことをご存知です。したがって、神の子どもは、祈りですべてのことを解決することができます。ジョージ・ミュラーが告白するのに、祈りとは、キリストの力を握る手だと言いました。今からそのまま仕事をするのではなく、祈りの中で仕事をして、そのまま勉強するのではなく、祈りの中で勉強してください。神様の力がいつもあなたとともにあるようになるでしょう。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」エレミヤ 33:3




神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してください。キリストであると信じます。いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子ども 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



エリ、エリ、 レマ、サバクタニ

地球は大きく地と海でできている。自然に代弁されるこの大きな物体は、生活の基盤にもなって、喜びにもなるが、ある瞬間に、相手にしにくい怪物に変わり、人間を攻撃して傷や痛みを与える。それでも、その存在は悠々と現象を維持している。なにも起きていないことのように。記録上で現れた歴史の中の最初の人類の大惨事は、ノアの箱舟事件だ。神様のみこころを断ったため起きたことは、船に乗った家族の他は生き残ることができなかった。それ以後、人類には、大小の戦争の惨禍と、宗教の葛藤による殺戮と、環境による災いが絶えず続いてきた。

いのちが存在する間には、神の存在を確認しなくても大丈夫であるような自由が人々には普遍的にある。しかし、絶対絶命の危機が迫った時は、絶対的な相手である自然と、目に見えず探すこともなかった神の存在を確認しようと思う。今、チンド近海で起きた旅客船大惨事によって、全国民と世界が痛みを感じて苦しんでいる。避けられなかった自然災害というよりは、人間の欲がもたらした虚しいことが連続して現れた結果で、さらには美しく花を咲かせなければならない私たちの未来の卵が、なにもできずに倒れていったことに対して、私たちは茫然自失するしかない。だれがその涙をふいてくれて、その痛みを抱いてくれるのだろうか、ということだ。このとき、本当に神様がおられるなら、どうして、このような事があるのか。

愛の神様が痛みを受ける瞬間に、私たちの子どもたちをなぜ守ってくださらなかったのだろうかという質問することができる。日本の作家遠藤周作が書いた「沈黙」に、まさにこういう状況が描写されている。宗教の理由で生きていく人々を、国家が邪魔するので、死に達するようになった人々が、海辺の杭に縛られて上げ潮の時に死ぬようになる状況で、はたしてお前たちが信じる神様はおられるのか。私が呼ぶ神様はなぜ私を守ってくださらないのかという質問

が当然現れるしかない。しかし、神様のその沈黙は、ご自分のひとり子イエスが十字架で、人類のすべての罪をみな担って苦しみの中で死ぬ現場でも現れる。その死の現場で、御子イエスは、孤独と苦しみの中で捨てられたという自己恥辱感の中で押し寄せる心から大声を出した。アラム語で現されたこのことばは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですかという意味である。

残忍な4月に行われたチンド旅客船惨事は、人類の救い主として死ななければならない十字架の現場と、分からない問題の中で起きる災いの中での霊的事実を見るようにさせる。そこに加えて、私にもそんなことが起きたら、そのときも神様は沈黙されるのかと思うのだ。しかし、重要な事実は、神様の沈黙は外面の沈黙でなく、共感の沈黙であり、あわれみの沈黙だ。私が最も苦しいとき、神様はその場を抜け出しているのではなく、最も近くにいて、最も悲しんでいるという事実だ。分からないその沈黙を理解できないのが当然である私たちの水準だ。遠藤周作の小説の舞台になった長崎には、文学館があって、そこに沈黙の碑が立てられており、彼が特別に書いた文章が残されていて、このような文が記されているという。「人間がこんなに哀しいのに主よ海があまりに碧いのです」苦しみがアザとなって、青くなったのが海というのが、悲しい彼らよ！

苦しみの中でも主を見上げられることを…
チョン・ヒョングク(福音コラムニスト)

* 相談したい方はこちらまでどうぞ